

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：22702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12375

研究課題名(和文) 看護師の小児看護への技能転移における状況的組織デザインモデルの開発

研究課題名(英文) Development of Environmental Design to Support Transfer of Learning Materialized Through Multidisciplinary Collaboration

研究代表者

川名 るり (KAWANA, RURI)

神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：70265726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、看護師の学習の転移を、伝統的な認知研究にみられる個人内変化という捉えから、状況内ダイナミクスと捉え直す転移研究のトレンドを採用し、働く場を異動した看護師のいる実践ではどのような状況との相互作用が展開され、看護師や組織にはどのような変化や発達が起こるのかを記述し、説明することを試みた。それによって、看護師の学習の転移を支える環境デザインの要素を検討し、状況的組織デザインモデルを提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

臨床現場で看護の技能をどのように向上させていくか、この課題に看護師の学習の転移を切り口とする点に、看護学における新たな転移研究としての学術的な意義がある。同時に、これまで十分に確立されていない、既に学んだ技能を組織内でより良く発揮することができる状況的組織的支援、フォローアップ体制を提案し、臨床現場に応用させる点で実用性が高く意義がある。

研究成果の概要(英文)：In clinical sites of nursing, the gap between the transferability of learning expected in nursing education and the actual transfer of learning has been reported in a variety of ways. In many of the reported cases, the nurse who has joined from other department is considered personally at fault, and the gap regarded as a problem.

In this research, I shift the camerawork over such transfer of learning from individual nurses to the workplace. The purpose of this study is to discuss, what kind of interactions with the circumstances develop in the actual workplace that received nurses transferred from other workplaces, how the interaction changes and evolves. Based on the findings, the environmental design that would allow these nurses to more fully demonstrate their skills will be considered.

研究分野：小児看護学

キーワード：学習の転移 看護師教育 小児看護 状況的学習論 組織

1. 研究開始当初の背景

日本では少子高齢社会が訪れ、医療状況は大きく変化してきた。特に小児医療では小児病棟の閉鎖や縮小化により、混合病棟や一般外来、小児科のない病院でも子どもとその家族の対応に迫られるようになった。そのため、小児看護の実践能力は小児科のような子どもの看護を専門とする看護師だけでなく、通常、大人を対象としている看護師にも必要となっている。その結果、慣れない子どもとその家族への看護に苦慮する現場の問題が報告されている。

他方、病院の体制として、専門性に特化した卒後教育だけでなく幅広い領域に対応できる看護師育成も重要視され、一定期間での配置転換が行われている。しかし、小児病棟では成人病棟からの配置転換で小児看護になじめず苦悩を抱える看護師の実情が表面化している。このことは既に指摘されてきたが、その時々課題への対策が講じられるだけで、大人の看護の経験を子どもへの看護実践に生かしていく組織的な支援のあり方やフォローアップ体制は、十分に確立されていないのが実情である。

日本の看護基礎教育では、さまざまな発達段階を各専門領域として細分化し、全ての学生がそれらを共通に学習するようプログラムされてきた。この広い領域が看護専門職の教育内容の基礎として保証されるべき内容であり、広く応用可能な能力の養成をめざすコアカリキュラムが進められてきた(文部科学省, 2017)。つまり、医療の現場において看護師には、たとえ専門外であってもそこでの専門家と協同して対処できるような、既に学んだ専門知識・技能を新しい状況に持ち運ぶことが本質的に期待されている。

こうした知識の可搬性を認知研究においては、学習の転移と呼び、「ある状況で獲得した知識が後の状況での問題解決や学習につながる現象を指す」(白水, 2012)とされる。看護学教育の背景にある考えは、このような認知科学領域における伝統的な転移の捉えと重なるところが大きい。

しかし、実際の臨床現場では看護学教育で期待される学習の転移可能性(「○○科で働いていたのだからここでもいけるだろう」とのギャップがある。なぜ、期待と実情が異なるのか。臨床現場において、看護師の学習転移を支援することは必至のことと考える。

以上の背景を踏まえ、研究代表者は異なる状況へ異動した看護師、特に成人領域から小児領域への異動に焦点を当て、働く場を異動した看護師の学習の転移を組織的に支援する状況的組織デザインモデルの開発に着手する必要があると考えた。学習の転移は未だ解明されていない部分が多いが、この研究では、学習の転移を伝統的な認知研究にみられる個人内変化という捉えから、状況内ダイナミクスと捉え直す転移研究のトレンドを採用し、学習が組織化される臨床現場の社会的プロセスを捉える方向へと発想を転換させる点に独創性を持たせた。そうした発想の転換によって、学習の転移を組織的に支援するという新たな方向性や学習の生じやすい環境デザインの要素が見いだせるのではないかと期待した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、働く場を異動した看護師、特に成人領域から小児領域への異動に焦点を当てて、成人看護で学んだ看護師の技能を小児看護という異なる状況でより良く発揮するための状況的組織デザインモデルを開発することであった。

本研究は次の3つの調査によって構成されている。

(1) 「学習転移の基礎となる看護専門教育を受けた専門家の対象理解」

この研究では、看護師が学習転移の基礎としてどのような看護対象(患者)理解をしているのかを明らかにすることを目的とした。

(2) 「働く場を異動した看護師のプロセスとしての学習転移」

この研究では、働く場を異動した看護師のいる実践の場はどのような状況との相互作用が展開され、どのように変化、発達するのかを明らかにすることを目的とした。

(3) 「海外病院視察」

海外病院の既卒看護師に対する支援を視察し、日本の看護師教育や支援への示唆を得ることを目指した。

3. 研究の方法

(1) 学習転移の基礎となる看護専門教育を受けた専門家の対象理解(平成29、30年度実施)

無記名自記式質問紙調査を実施した。調査対象はA看護師育成講座の小児看護学講義を受講したベテラン看護師37名であった。なお、ベテラン看護師とは、Benner(1984/1992)の熟達レベルを参考に、5年目以上のキャリアを持つ看護師とした。講義開始前に調査を実施、データ分析は大谷(2008, 2011)によるStep for Coding and Theorization(SCAT)を参考に実施した。この方法は質問紙による短い言語データからもその根底にある文脈を読み解くことを可能にするとされている(福士・名郷, 2011)。今回、看護師の抱く小児看護へのイメージという言語データをもとに、その根底にある対象理解の仕方を浮き彫りにした。所属機関の研究倫理審査委員会と育成講座を担当する理事会の承認を得て実施した。調査対象者には自由意思の保証、個人情報

報保護策などを口頭と書面で説明し、調査用紙の回収（後日郵送）をもって承諾が得られたものとした。

(2)働く場を異動した看護師のプロセスとしての学習転移（平成 29、30、31 年度実施）

質的研究デザインであり、参与観察とインタビューを実施した。研究フィールドは数年前に新設された総合病院内の離職者ゼロの小児病棟であった。看護師を惹きつける職場環境としてモデルになる病棟と考え、フィールドとして選定した。研究参加者は小児病棟の看護師を中心に交流する人々であった。データ分析はデータ収集と円環的に進め、データは文脈的に記述し、印象や疑問、過去の出来事との比較、目的との関連で考察して、知識が活用される場面の相互行為に注目して整理した（Emerson, Fretz & Shaw, 1995/1998）。所属機関の研究倫理審査委員会とフィールドの承諾を得て実施した。研究参加者には目的、方法、倫理的配慮などについて口頭と書面で説明し、書面で同意を得た。

(3)海外病院視察（平成 31 年度実施）

タイ国の総合病院の視察を行った。また、タイ国・当該病院における既卒看護師への継続教育と日本の継続教育に関して、施設の看護部長および CRD 部長とディスカッションを行った。

4. 研究成果

(1)学習転移の基礎となる専門家の対象理解

今回の研究の趣旨に同意をもらった 25 名（回収率 67.6%）のうち、分析対象となったのは小児病棟での臨床経験のない看護師 21 名のデータであった。

SCAT を用いた分析により、ベテラン看護師は包括的な対象理解の仕方、子どもを擁護される存在として理解していることが浮き彫りになった。また、擁護する実践者としての役割意識を持って小児看護をイメージすると同時に、小児看護を自分のリスクとしてイメージしているという二重性があることが明らかになった。

これらより、ベテラン看護師は転移の基礎となる専門領域に特化されない普遍的な包括的患者（または対象）理解のスキルを備えているものと考察された。さらには、次のような仮説が浮かび上がった。働く場を異動することに伴う看護師の転移不能性（とみなされる現象）は、表層の専門領域の差異を自他が過大にピックアップしているだけに過ぎない、つまり、“うまく転移できていない”という自他の評価によって前景化する社会的な可視化の結果ではないかという仮説である。これらが看護学における学習転移への期待と実情の間に潜在する課題である可能性が浮かび上がった。

以上を踏まえ、学習転移の起きる臨床現場で事例を収集する、次なるアプローチへとつなげた。

(2)働く場を異動した看護師のプロセスとしての学習転移

離職者ゼロの小児病棟での参与観察とインタビューを通して、働く場を異動した看護師のいる実践の場の特徴として学習転移に関与する、理想の看護が展開される協働の場、学習の場としての相互行為、周辺参加からののはじまり、という 3 つの特徴を見出した。

理想の看護が展開される協働の場

病棟のナースステーション近くにある医療依存度の高い子どもの入院する病室では、子どもの命を守るために、様々な職種のスタッフが緊張感を持って頻繁に出入りし情報交換していた。そこで看護師は協働して理想の看護を目指してケアを展開していた。

学習の場としての相互行為

の病室は、異動してきた看護師にとっては病棟のやり方や考えを知ることができる場であり、病棟の古参者にとってはこれまで病棟で行ってきたやり方とは異なる方法を知ることができる場となっていた。その場は互いに即興的にさらに技術を変化させ発揮させていく、相互学習の場であると考察された。

周辺参加からののはじまり

異動して間もない頃の看護師は、の病室との距離を置いていたが、徐々に離れた所から眺める行為が病室内へ、さらには、直接的なケア参加へと実践参加の様相を加速的に変化させていた。この一連の過程を働く場を異動した看護師の転移の過程と捉え、支援について考察した。

(3)海外病院視察

タイ国は大学卒の看護師の地位が高く、視察した総合病院では基本的に配置転換がなく日本で生じている看護師の学習転移課題の背景とは事情が異なっていた。転移課題の解決には、その国の医療事情が深く絡んでいることが改めて浮き彫りになった。

以上の(1)(2)(3)で得られた研究成果を統合させて、日本の臨床現場における看護師の学習の転移を支える環境デザインについて検討した。環境デザインには、個を育てる視点ではなく、共同して学習する場を育てる視点で捉えなおす重要性を盛り込んだ。そして、働く場を異動した看護師の実践参加を支え、相互学習の場を発展させるための諸要素を組み込んだ状況の組織デザインモデルを提示した。

文献

- Benner, P. (1984) / 井部俊子・井村真澄・上泉和子訳 (1992). ベナー看護論. 医学書院.
- Emerson, F., Fretz, R. I., & Shaw, L. (1995) / 佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳 (1998). 方法としてのフィールドワーク. 新曜社.
- 福土元春・名郷直樹 (2011). 指導医は医師臨床研修制度と帰属意識のない研修医を受け入れられていない - 指導医講習会における指導医のニーズ調査から -. 医学教育, 42(2), 65-73.
- 文部科学省 (2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf. 【2022.6.19 検索】
- 大谷尚 (2008). 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 54, 27-44.
- 大谷尚 (2011). SCAT: Step for Coding and Theorization. 感性工学, 10(3), 155-160.
- 白水始 (2012). 認知科学と学習科学における知識の転移. 人工知能学会誌, 27(4), 347-358.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 川名るり, 江本リナ	4. 巻 29
2. 論文標題 高校生に向けたアクティブラーニングによるいのちの授業 - こうのとりのゆりかごを題材にして -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本小児看護学会誌	6. 最初と最後の頁 17-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20625/jschn.29_17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川名るり, 江本リナ, 吉田玲子, 山内朋子, 鈴木健太, 楠田智子, 筒井 真優美	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 小児看護学実習における学生の「わかった!」というアハ体験 - 学びへの転換 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本赤十字看護学会誌	6. 最初と最後の頁 18-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24754/jjrcsns.21.1_18	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川名るり, 仁宮真紀	4. 巻 72(13)
2. 論文標題 「わざ」の伝達と倫理的感受性 - その技は誰にとってすぐれているのか -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 看護	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川名るり	4. 巻 13
2. 論文標題 子どもの骨折「なぜ起こる」「どう防ぐ」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本運動器看護学会誌	6. 最初と最後の頁 021-025
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有元典文	4. 巻 59(6・7)
2. 論文標題 教育において殻を破り自分を広げるべきは誰か? いっしょに生きる技術としての発達最近接領域	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 女子体育	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 川名るり
2. 発表標題 小児看護学実習固有の学びとは? - 実習で大切にしたいことを臨床・学生・教員間で共有
3. 学会等名 日本小児看護学会第31回学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ruri Kawana, Norifumi Arimoto
2. 発表標題 Images of Child and Family Health Nursing Held by Nurses without Experience in the Area
3. 学会等名 23rd East Asian Forum Of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川名るり・有元典文
2. 発表標題 学びのパフォーマンスのデザイン (4) - 医療現場での具体的なパフォーマンスとしての転移
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川名るり
2. 発表標題 子どもの骨折「なぜ起こる」「どう防ぐ」
3. 学会等名 第17回日本運動器看護学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 川名るり	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本看護協会出版会	5. 総ページ数 128
3. 書名 「わざ」を伝える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	有元 典文 (ARIMOTO NORIFUMI) (30255195)	横浜国立大学・教育学部・教授 (12701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------